

2023 年度 日本財団助成事業

「国境を越えて移動する子どもと家族のための相談支援」

支援者向けセミナー『移住者とソーシャルワーク』

実施報告書

2024 年 3 月

社会福祉法人 日本国際社会事業団

日本財団の助成を受け、移住者の支援を行う団体職員・ボランティア、移住者への対応に苦慮している福祉専門職などを対象に、2023年12月から2024年まで4回(7講義、1演習、2対談)のセミナーを開催した。

1. 背景

2022年末に日本で暮らす外国人数は307万5,213人となり、コロナ禍を経て再び増加に転じた。国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、2070年に日本の総人口に占める外国人の割合は、観光などの短期滞在者を除いて10%を超えるという。これは、日本人人口の減少に伴い、外国人人口(=移住者)の割合が増えるということを意味する。移住者は都市部や他の移住者がすでに多く暮らしている地域に集住する傾向があるため、実際には一部の地域においては10%を越え、地域内での多様化が一層進むと考えられる。

医療、教育、福祉といった生活に関わる様々な現場では、すでに移住者への対応が不可欠になっている。これらの分野においては、もともと、サービスの利用者としての「外国人」の存在が想定されておらず、そのため特別な教育や研修が行われる機会が少なく、難しい支援の課題はそのまま残されている。一方、外国人支援を行う団体として認識されつつあるのが、これまでは外国(人)との交流を中心に活動してきた団体である。海外の姉妹都市や外国人との交流に主眼を置いてきた国際交流協会は、地域差はあるものの、移住者のニーズに対応するようになり、支援の実践を積み重ねている。同様に、交流や多文化共生を掲げるNPOなども多様なニーズに応えようとし、結果的に福祉的な支援(病院同行や手続き支援、家族への介入や通訳の調整など)を行っている団体もある。外国人人口の割合が高い自治体では多文化共生の重要性が高まり、行政機関も相談窓口を設けたり、民間に委託して相談を受ける体制などを整えつつある。

このような支援および支援者向けの研修では多文化ソーシャルワークが重要視されているが、その他には、本来対人支援のための学問領域であるソーシャルワークが取り入れられることは多くない。「状況の中の人」をどのように理解し、どのように支援すべきか、というミクロなソーシャルワークはあまり検討されず、在留外国人の数や傾向、政策、法制度などを踏まえて、社会福祉とは異なる分野に外国人の支援体制ができていない。難民を含む移住者のニーズは往々にして複合的で複雑性が高く、ケースごとの差異も大きい。インテーク、アセスメントや支援計画、ケースマネジメントが体系的にできていないと、解決困難な事案が増え、未解決のまま残される懸念もある。また、個人の支援だけではなく、ファミリーソーシャルワークやコミュニティソーシャルワークなど、環境への働きかけも重要である。当事者にとっては、交流でも多文化共生でも福祉でも大きな問題ではないが、それぞれが抱える困難が適切に解決されなければ、その不利益は大きくなる。

これらの問題意識から、今年度のセミナーは、移住者のためのソーシャルワークに焦点を絞り、当事者理解と支援スキルの向上を目指すものとした。諸外国のソーシャルワーカー養成のためのカリキュラムを参考に、理論と実践の両側面から学べるように組み立てた。

2. 開催概要

セミナー用ウェブサイト:<https://www.issj.org/seminar-2023/>

【プログラム】

第1回 2023年12月2日(土) 13:00~16:15 開催方法:オンライン			申込者数
講義1	ソーシャルワーク概論:移住者支援におけるソーシャルワーク	森 恭子	計 50 名
講義2	移住女性と家族への支援	南野 奈津子	
対談1	当事者との対話	カディザ ベゴム	
第2回 2024年1月20日(土) 13:00~16:15 開催方法:オンライン			申込者数
講義3	難民化のプロセスとメンタルヘルスー多文化間メンタルヘルスの視点から	鶴川 晃	計 62 名
講義4	相談援助とカウンセリング	南野 奈津子	
第3回 2024年1月27日(土) 13:00~16:15 開催方法:対面			申込者数
講義5	文化の多様性に関するソーシャルワークの実践原則	ヴィラーグ ヴィクトル	講義のみ:32名 演習あり:20名
演習1	移住者に対する社会の中の偏見とそれへの対応を考える	ヴィラーグ ヴィクトル	
第4回 2024年2月17日(土) 13:00~16:15 開催方法:オンライン			申込者数
講義6	移住者コミュニティの理解	ISSJ 近藤	計 53 名
講義7	アセスメントと課題の整理	ISSJ 石川	
対談2	当事者との対話	シャン カイ	

【セミナーの目的】

- ・ ソーシャルワークとしての対人支援について理解する
- ・ 多様な視点を持って当事者を理解し、支援できるようになる
- ・ ソーシャルワーク的な支援を実践に活かせるようになる

【受講対象者】

- ・ 移住者の支援に関わっている外国人相談員や民間団体、ボランティアの方々、又は、これから支援に携わりたいと考えている人
- ・ 職務としてソーシャルワーカー的な働きを担っている人、又は、ソーシャルワークの手法や役割に関心がある人

【参加費】

- ・ 通しチケット(演習あり):12,000 円(学生 10,000 円)
- ・ 通しチケット(演習なし):10,000 円(学生 8,000 円)
- ・ 各回のチケット:3,250 円(学生 2,250 円)

3. 各回の振り返り

【第1回】

各回での参加申し込みも可能としたが、全4回を通しての参加者が多数となることを想定し、第1回では、その後の6つの講座のベースとなる「ソーシャルワーク」について、その歴史や考え方、視点を概論的にお話しいただく時間(講義1)を設けた。その上で、移住者を労働者としてではなく生活者として捉えた際に、より脆弱な立場に置かれやすい移住女性の実情や支援ニーズについて、ソーシャルワークの視点から考える講義2へと移った。さらに、より良い支援を実践するにはより良い当事者理解が不可欠であるという本セミナーの根底にあるコンセプトに鑑み、移住女性当事者と講師による対談(対談1)を行った。移住者として、女性として、ムスリムとして、母親として、そして一人の人間として日本で生きる経験や想いを、インタビュー形式でお話しいただいた。

【第2回】

移住者へのソーシャルワークにおいて、いわゆる日本人への対応と大きく異なるのは、国境を越えた移動、すなわち、文化・言葉・習慣・価値規範等の異なる場所への移動を経験した人と対峙しているという点である。とりわけ、難民においては、日本国内では経験し得ない背景を有して、国境を越えて移動している。移動の経験は、メンタルヘルスに大きな影響を及ぼすものの、それらについて支援者が学ぶ機会は多くない。講義3では、移住先での心理的適応と心の病について、支援者が留意しておくことが望ましいことも合わせてご講義いただいた。移動によって生じる心理状況の変遷とそれによる身体症状や対人関係の変化を踏まえた上で、そのような背景を持つ移住者をどのように支援していくことができるのか、より具体的な対人支援としてのソーシャルワークの手法を講義4では学んだ。

【第3回】

第3回は、初めての対面実施となった。移住者へのソーシャルワークを実践するにあたっては、文化的コンピテンス、すなわち、特定の社会集団内で共有される文化を適切に理解し、学習し、効果的に実践できる力を高めることが不可欠である。そのためには、文化の多様性に目を向けるだけでなく、自身の価値規範を規定する文化やマジョリティが纏う権力性に自覚的であることが求められる。頭で理解するだけでなく、体験し、体感することでより効果的な学びを得られるが、偏見や自己覚知といったセンシティブな内容を取り扱うこととなる。そのため、心理的安全の確保という面からも、対面かつ少人数での演習という形で開催した。講義5において、文化の多様性に対応するためのソーシャルワークの基本や文化的コンピテンスとは何か、理論的側面から学んだ上で、自己覚

知を促し、偏見や差別が社会にもたらす影響について考えることを目的としたグループワーク(演習1)を行った。演習では、社会の中にあるステレオタイプと自身の中にあるステレオタイプについて向き合う「レッテル貼り」のワークを行い、それらが支援や社会に及ぼす影響について、グループごとに議論した。

【第4回】

最終回となる第4回は、これまでの研究者の先生方からの理論的な枠組みやマクロな視点を踏まえて、より実践的な内容をISSJの事業担当者よりお話しさせていただき回とした。具体的には、メゾレベルへのソーシャルワークアプローチとしての移住者コミュニティ支援について(講義6)、クライアント一人ひとりにソーシャルワーカーとして向き合う際のよりミクロな視点から、アセスメントについて(講義7)、それぞれの事例を紹介しながら、日々の取り組みの中で留意していることやケースを通しての学びを共有した。フィナーレとして、移住者の若者当事者との対談を行った。移住者二世としての経験や思い、二世から見た移住者コミュニティと日本社会など、当事者の視点からの語りは、普段忘れてしまいがちな、支援する者と支援される者という枠を超えて、共に生きていくにはどうしたら良いのかという根源的な問いに立ち返るきっかけとなった。

4. 考察

1) 相談内容の多様さとそれらに対応できる支援者の不足

アンケートの回答内容からは、移住者からの相談内容が極めて多様でありながらも、それらの全ての相談が一つの窓口／一人の相談相手に寄せられがちであることが見て取れる。移住者も、日本社会でそれぞれに生活を営んでいる以上、人が生きる上で生じる様々な課題を抱え、支援を求めることは当然であり、移住者であるからと言って、その支援ニーズが特定の分野に限られるわけではない。福祉領域に限らず、日本において各種行政サービスは縦割りで、相談窓口もそれぞれに異なっている一方で、移住者にまつわる相談は縦割りの枠組みでの対応が難しく、外国人支援団体に一様に流れ着いていると考えられる。相談が集約される場があること自体は悪いことではないが、寄せられる多様な相談内容一つ一つに対して、十分に対応できているとは言えないのが現状であろう。

というのも、現在各地で整備され始めている外国人相談窓口の多くは、情報提供のみをその役割としている。アンケートからも、情報提供や他機関へのつなぎまでは行っているが、支援にまで入っている団体／個人は少数派であることが明らかとなっている。課題を抱える移住者にとって、利用可能なサービスや制度があることと、それらにアクセスすること、使いこなせることとの間には、大きなギャップがあることが少なくない。それらは時に、言葉の問題に落とし込まれてしまうが、必ずしも言語だけが問題になっているわけではない。したがって、言葉のみを置き換えた情報提供だけでは、課題解消に至らず、場合によっては回しを生み、そのような失敗体験や失望は、移住者が外部(家族やコミュニティ以外の人)への相談を寄せることの阻害要因としても働くことが予想される。

これらは、支援者個人の資質という問題だけでなく、支援体制のデザインそのものに関わる課題

である。現在、外国人支援コーディネーターの養成が進められようとしているが、支援をコーディネートするだけでなく、当事者の持つ力を見極めながらも、実際に具体的な手続き支援や伴走型の支援までを担える体制を整えていくことが不可欠であろう。外国人支援コーディネーターをより有効な存在とするためにも、支援までを担える体制を取ることの有効性を示していく必要があると考えている。

2) 対面での実施と人的つながりの構築

今後取り上げてほしい内容・テーマとして、各分野の専門家からの話や事例検討、他団体・他分野とのネットワークづくりにもなるような交流会的なセミナーという声が複数寄せられた。移住者の支援では、移住の経験による特有の課題と国籍を問わない生活課題が組み合わせられ、その組み合わせが移住の背景や文化的背景、在留資格などによって極めて多様であるため、全てのケースが同じ方法で解決に至るわけではない。そのため、実践を積み重ねながら知見を蓄積していくことも重要となるが、一人、あるいは一つの機関のみでの経験には限りがあり、知見にも偏りが生じる。関わりを持てる他団体・分野も限定的とならざるを得ないだろう。一方で、支援に携わっている人であれば、より良い支援のためには、関連する他分野の知識や情報を得て、困った時には頼り合えるネットワークを持ちたいと考えるのは当然のことであるとも言える。

コロナ禍以降に企画してきた本セミナーは、地方からも参加できるというメリットも踏まえ、オンラインで実施してきた。今回、第3回を対面で開催した際には、他の参加者との交流ができたことへの喜びの感想が多く寄せられ、閉会後も会場が借りられる時間ぎりぎりまで話し込んでいる姿も見られた。「一度対面で話していることが、何かあった時の連絡の取りやすさにつながる」という声も聞かれ、場を共有することの重要性を再認識させられた。

さらに、ここで生まれた交流を一過性のものとするのではなく、情報交換のためのプラットフォームを作成したり、再度、意見交換ができる場を設けたりするなど、より有機的なつながりへと進展させていけるような仕掛けをつくっていけると良いと考える。

3) 支援への迷いや難しさと身につけたいスキル・知識とのギャップ

アンケートの回答からは、移住者への支援を難しくさせているものとして、相談者の文化や価値の違いや、それに基づくコミュニケーションの違い、それにより十分な状況把握ができないことが上位にあげられる。その一方で、より良い支援のために身につけたい知識やスキルとしては、在留資格や社会資源といったきわめて具体的な制度や手続きについての情報という回答が上位を占める。文化や価値といった捉えることが難しく、抽象度の高い事柄への悩みや迷いをもちながらも、それらにどのようにアプローチして良いのかわからず、在留資格や利用可能な制度という具体的な切り口から解決を図ろうとしている様子を読み取れる。漠然とした状況のわからなさに対して解消する術すらわからない、という悩みの深さを物語っていると捉えることができるかもしれない。

そういった意味において、第3回に取り入れた「文化的コンピテンス」に関する講義と演習は、How to ではない形で文化や価値をどのように学ぶことができるのかという問いへの一つの回答で

あったと考える。第3回の参加者は、全員がすでに移住者支援に携わっている人であったが、このような演習は、これから移住者支援に携わる人、携わる可能性がある人にとっても極めて重要な経験になることは間違いない。このような講義と演習ができる講師が限られていること、心理的安全性という意味において開催方法が制限されることなど、簡単ではないが、より多くの人へアプローチできるように考えていきたい。

5. 今後に向けて

今年度のセミナーでは、対象者を幅広く設定し、移住者の支援にすでに携わっている人もそうでない人も、ソーシャルワークについて学んだ経験がある人もそうでない人も、関心がある人に多く参加してもらうことを目指した組み立て及び広報を行った。それは、移住者が抱えやすい課題やそれへの対応について社会的な認知を高め、理解をする人が増えることで、様々な現場でより円滑な支援につなげることができる、という狙いをもってのことである。一方で、各回での質疑応答やアンケート結果から、セミナーへの参加者は何らかの強い想いをもち、より良い支援を提供したいと積極的に考えている人に限られているということも実感させられた。一口に「外国人支援」といっても、情報提供やコーディネーション、伴走支援など、その内容は多岐にわたり、今後は用語の使い分けもあるかもしれない、そのような環境の中で、今年度は外国人支援に意欲のある人が参加してくれたと思われる。

セミナー実施を通して、移住者の現状や課題について知ってもらい、支援のすそ野を広げていくことを目指すのか、すでに支援に携わっている人たちのスキルアップや専門家とのネットワーク構築を目指すのか、そのどちらの方向に舵を切っていくのかを検討していく必要がある。これらは、より良い支援を実践するための両輪であるとも言えるが、その二つのアプローチは大きく異なることは明白であり、ある程度切り分けていく必要がある。

「当事者の声に向き合う」「ソーシャルワーク」というISSJの価値を打ち出しながら、セミナーをどのように位置づけ、いかなる社会的な役割を果たしていくことを目指すのか、改めて考えていきたい。

資料編：アンケート結果詳細

【第1回】回答数：27件

1. 外国につながる女性や家族に関わる相談を受けたことがありますか（当事者及び関係者から）。または、これから相談を受ける可能性がありますか。

選択肢	回答数（件）
相談を受けたことがある（専門職として）	13
相談を受ける可能性がある（専門職として）	7
相談を受けたことがある（知人、友人、ボランティアとして）	3
相談を受ける可能性がある（知人、友人、ボランティアとして）	1
相談を受けたことはない	2

2. （「受けたことがある」、「受ける可能性がある」の場合）どのような相談がありますか。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
医療関係（メンタルヘルスを含む）	18
保育・教育関係（入園、入学、就学、進学など）	16
生活困窮	15
就労関係	14
日本語・日本語教育機会に関する事	14
在留資格など入管に関する事	12
家族関係（家庭内暴力など）	10
障がい・発達・療育に関する事	10
母子保健・出産に関する事	10
結婚・離婚など法律に関する事	10
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ 虐待
- ・ 住居探し
- ・ 行政手続き（税の申告、社会保険、年金など）
- ・ 高齢期の介護問題など

3. （「受けたことがある」の場合）相談を受けた後でどのような支援を行いますか。

※複数回答可

選択肢	回答数（件）
情報の提供	12
適切な機関、支援団体、専門家へのつなぎ	11
傾聴	10
手続きの支援（書類記入の手伝いなど）	9
家庭訪問、アウトリーチ	6
同行支援	4
緊急保護	3
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ 職場内でのコミュニケーションの仲介
- ・ 話し合い

4. 「受けたことがある」の場合）移住女性や家族との関わりの中で難しいと感じることは何ですか。※複数回答可

選択肢	回答数（件）
文化や価値観の違い	11
コミュニケーション（当事者の言っていることが理解できない、何に困っているのかが良くわからない、こちらから当事者に伝えたいことが理解されない）	10
相談者の生活状況、背景事情がよくわからない	10
適切な支援や資源、連携先がない又はわからない	8
本国法がよくわからない又は調べられない	7
情報提供までしかできない	3
在留資格など入管法がよくわからない	2

5. 「受ける可能性がある」、「受けたことはない」の場合）移住女性や家族と関わるにあたり、不安に感じていることは何ですか。※複数回答可

選択肢	回答数（件）
相談者の生活状況、背景事情をどこまで理解できるか	14
文化や価値の違い	11
コミュニケーションが取れるか	10
適切な関わり、働きかけができるか	10
必要な情報を調べ、提供できるか	9
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ 事実が把握できない

6. 移住女性やその家族の相談支援に際しては、どのような知識・スキルを身につけたいですか。※複数回答可

選択肢	回答数（件）
在留資格や社会資源、法制度に関する知識	26
当事者の置かれた状況や背景を理解するための知識・スキル	24
関係機関との連兼、ネットワーキング	24
文化や価値観を理解する力	21
自分自身が持っている価値観や思い込みに気が付く力	21
その他	

その他の回答（抜粋）；

- ・ 信頼関係を継続的にできるつながり方
- ・ 話し合いの中では把握できない相談者の状況確認

【第2回】回答数：27件

1. 難民や移住者のメンタルヘルスに関わる相談を受けたことがありますか（当事者及び関係者から）。または、これから相談を受ける可能性がありますか。

選択肢	回答数（件）
相談を受けたことがある（専門職として）	14
相談を受ける可能性がある（専門職として）	4
相談を受ける可能性がある（知人、友人、ボランティアとして）	4
相談を受けたことがある（知人、友人、ボランティアとして）	2
相談を受けたことはない	2
その他	

2. （「受けたことがある」、「受ける可能性がある」の場合） 難民や移住者のメンタルヘルスに関わる相談や支援の中で難しさを感じるのはどのようなことですか？ ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
言語の壁（十分にコミュニケーションが取れない、通訳が確保できないなど）	21
医師や医療機関、相談先に関する情報（難民や移住者について理解のある医師がどこにいるかわからないなど）	13
文化的差異（メンタルヘルスに関する捉え方の違いなど）	12
医療ニーズの程度や緊急度の判断	10
生活状況や背景の理解	10
生活困窮（医療費、カウンセリング費用の支払いなど）	10
対応方法がわからない	7
病院へのアクセス（予約、紹介状取得、同行など）	6
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ 診断や治療への本人の理解度
- ・ 在留資格がない方への支援の限界

3. 難民や移住者のメンタルヘルスについて、あなたが属する機関またはご自身では、どのような支援を行うことができますか。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
受診可能な医療機関に関する情報提供	17
地域の相談機関や保健センター、民間団体の紹介	17
地域の相談機関や保健センター、民間団体へのケースについての連絡（ケース紹介）	12
医療機関の予約	11
無料相談会などの紹介	10
受診同行	10
通訳の手配	8
支援は難しい	3
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ メンタルヘルスに関する企画

4. 移住者本人から直接相談を受けることがありますか。（メンタルヘルスに限らない）

選択肢	回答数（件）
受けたことがある	19
受けたことはない	5
直接話すことは少ない	3

5. 「受けたことがある」の場合）相談を受ける時にどのようなことに気をつけていますか。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
背景事情や生活状況の理解	20
難しい内容は一人で抱え込まず、上司や専門家に相談する	16
文化的差異	14
言語（アプリ利用、通訳利用、できるだけ日本語を利用するなど）	13
ラポールの形成	11
非言語コミュニケーション	10
こちらが意図することや日本の制度を理解してもらう	9
相談者のジェンダー	6
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ その国のちょっとしたあいさつなどの言葉をつかえるようにしておく
- ・ 相談者の国について情報を得ておく

6. 相談を受け、適切な支援につなげるためには何が必要と感じますか。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
他の文化や宗教に関する知識	20
メンタルヘルスに関する知識	20
移住者に関わる法制度に関する知識	18
難民に関する知識	18
ソーシャルワークの理論と実践	17
当事者の話を聞く機会	17
同業者のネットワーク	16
他専門家とのネットワーク →どのような団体との繋がりがあると良いか、具体的に教えてください。	16
事例検討の機会	16
他団体とのネットワーク →どのような団体との繋がりがあると良いか、具体的に教えてください。	15
アセスメントに関するスーパービジョン	12
その他	

必要と思うネットワーク（抜粋）：

- 色々なルーツを持つ方のコミュニティや、支援団体とのネットワーク
- 地域のインフォーマルな団体、法律関係の専門家、人権保護の団体などとの繋がり

【第3回】回答数：10件

1. 移住者への支援にかかわらず、文化的コンピテンスについて、これまで意識したことはありますか。

選択肢	回答数 (件)
はい	8
いいえ	1
その他	

その他の回答 (抜粋) :

- ・ 意識としてはあったが、理論としては今回初めて学んだ

2. 本日の講義を聞いて、「文化の多様性」の捉え方が変わると感じますか。その理由をお聞かせください。

選択肢	回答数 (件)
はい	7
どちらとも言えない	2
いいえ	1

「はい」の理由 (抜粋) :

- ・ ワーカー自身が影響を受けている文化を自覚することは、これまであまり意識していませんでした。
- ・ 自分の価値観や外国にルーツのある方への認識が、周りの人たちと同じものではないことを、講義を通じて気づきました。自分の考えを基本にして、物事を考えたり、相手を理解しようとするところから、改めなければいけないと思った。
- ・ まずは自分の文化に対する自己認識を高めることに注力したいと思いました。その上で、クライアントの文化を理解し、尊重していく姿勢を身につけていきたいと思われたため。
- ・ これまでも「文化の多様性」は意識しながら支援を行ってきたつもりですが、今日の講座で「自己覚知」についてももう一度自身で整理したいと思いました。

「どちらとも言えない」の理由 (抜粋) :

- ・ 長年外国 (複数国) に住み自身が外国人として文化の多様性を経験しているので。

「いいえ」の理由 (抜粋) :

- ・ 先生のお話を伺い、相手の方の文化の歴史やその方の多様な価値観を知ろうという開かれた心持ちや積極的に関心を示し、柔軟に対応していく大切さを強く感じる事ができました。

3. 地域における多文化共生と多様性の包摂をすすめるために、メゾレベルの文化的コンピテンスは必要と感じますか。その理由をお聞かせください。

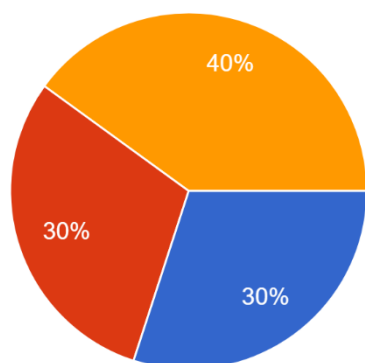
選択肢	回答数 (件)
はい	10
どちらとも言えない	0

いいえ	0
-----	---

「はい」の理由（抜粋）：

- ・ 同じ地域で生きていく者同士、どんな背景・文化を持っているのかを理解することは、お互いが心地よく過ごすことに繋がると思うからです。
- ・ ミクロでいくら努力しても、個人を取り巻く環境を整えなければクライアントの生活全体をより良いものにすることが難しいから。
- ・ メゾレベルでの文化的コンピテンスを高めることに関わる中で、ワーカーやクライアント自身の認識も変えられていき、さらに大きな力となって社会変革に働きかけるものへとつながっていくと思ったため。
- ・ 地方で活動する者として、本日学んだ「メゾ・レベルの文化的コンピテンス」は都市部から離れた地方で取り組みが求められているものだと感じました。

4. あなたが所属する組織・団体・コミュニティは、文化的コンピテンスについてどの程度の発展段階にあると思いますか。



選択肢	
●	組織としては文化的な認識が低い
●	文化的コンピテンスについて認識している
●	文化的コンピテンスの向上に意欲がある
-	文化に関する知識・技術が蓄積されている
-	高い文化的コンピテンスがある

5. 日々の支援や人との関わりの中で、反差的な実践を心がけていますか。その理由をお聞かせください。

選択肢	回答数（件）
はい	7
どちらとも言えない	3
いいえ	0

「はい」の理由（抜粋）：

- ・ クライエントが直面している困難は、その人が社会の周縁に置かれているためだということが、よくあると思います。そのために、私が持っている特権は、自覚的でいたいと思っており、AOPの勉強もしています。
- ・ 日本の会社でのルールを伝える時にも、実習生本人は、知らないだけであるので、ルールの意味を伝えながら、本人の行動を否定しないようにする。
- ・ 人はみんな同じように尊重される存在だから。

「どちらとも言えない」の理由（抜粋）：

- ・ 相手や相手の文化に対する尊重を心がけてはいるけれども、無意識のうちに、自分の文化から見た見方で発言や行動をしてしまい、相手を尊重していなかったと後から気づくこともあるため。
- ・ 反差別的な実践はとても重要な視点であると意識しつつ、自分自身が積極的に実践できているのかと思うと、まだまだ実践や努力が足りていないと感じております。現状の社会制度を当たり前と思わず、クリティカルシンキングの視点を持ち、自分に何ができるのか考えていきたいと感じました。
- ・ とても大切だということが今回の研修で改めて実感できたが、大きなものに巻かれてしまうことがあるな…と、反省もする研修でした。

6. 自己覚知を深めるために意識していることや、工夫していることを教えてください。

回答（抜粋）：

- ・ 職場内で、自分が持つケースを積極的に共有しています。自分の考えを言語化することは、自己覚知に繋がると思います。
- ・ 自分の考えは、何かからくるのか考える。突き詰めると、不安や恐れから始まる 경우가、多いと感じる。
- ・ 日々の生活の中で感じる感情をふり返る時間を持ち、どこからそのような感情が来ているのかを探るなど。また、自分自身の仕事上での経験をふり返り、自分の今の思いや行動とのつながりを探るなど。ふり返ったことを安全な関係の中で聞いてもらう時間を持つ。
- ・ 研修を受け、知識を学びながら、偏っている見方をしていないか自身の価値観を振り返るよう意識しております。
- ・ 専門家の話を聞いたり、論文を読んだりして、見聞きすることや自身が体験することを理論に当てはめて考察する。
- ・ 自身の相談支援の対応を振り返り、同僚と意見を交わしたり、研修に参加して学びを深めたりするよう心掛けています。
- ・ 在日コリアンの歴史等をはじめ、自ら学び、関係者との交流を広げていくことで、自身の中にある差別意識や固定概念、価値観と向き合う。

【第4回】回答数：17件

1. 移住者コミュニティと何らかの形で関わったことがありますか。

選択肢	回答数（件）
関わったことがある（知人、友人、ボランティア等として）	8
関わったことはないが、関心を持っている	7
関わったことがある（専門職・業務として）	2
関わったことはない	0

2. （「関わったことがある」の場合）どのような関わりでしたか。また、移住者コミュニティとの関係構築や維持のために工夫していること、関わりの難しさを感じたことなどがあれば教えてください。

回答（抜粋）：

- ・ 外国で生活日本人コミュニティの支援をボランティアでしていました。同じ当事者性を持った中で、どのような距離感をもって関わるかという点や、移住者コミュニティとのつながりの濃淡や、現地コミュニティとのつながりを欲するかどうかなど、それぞれの温度差を踏まえるように留意していました。
- ・ 学生時代に中国残留孤児帰国者の子どもたちの学習支援団体で学習支援のボランティアをしました。またインドシナ難民の定住促進センターでの実習で出会ったベトナムからの子どもをその団体に繋げ、一緒に学習支援をする機会がありました。移住者という背景と学習支援のニーズは一致していましたが、居住地域が離れていた（ベトナムの子どもは）一人であったこともあったので、継続は難しかったように記憶しています。
- ・ 子どもの学習支援を通じてその家族・コミュニティメンバーへの手続き・同行支援
- ・ 留学生のサポートをしている NPO が借りている学生寮にて、交流イベントへの参加や日本での生活についてインタビューをする。気をつけていることは、日本人が当たり前と思っていることでも、彼らにとっては初めてのこともかもしれない。知らない場合は、なぜ日本では大事にされているかを伝える。今後気をつけてもらえるように、具体的な行動を共有する
- ・ 海外にルーツのあるお子さんの学習支援のボランティアに参加したことがあります。直接、相談を受ける立場ではないのですが、参加しやすい雰囲気を作ることができるように歓迎していることが伝わるよう笑顔で対応することを意識しています。

3. （「関わりがない」の場合）その理由を教えてください。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
地域にどのようなコミュニティがあるのかわからない	3
コミュニティの存在は掴んでいるが、どのようにアプローチして良いかわからない	3
地域住民として個別に対応している	1
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ DV 等の女性を支援しているため、男性主導のコミュニティに協力を求めたり接触をすることは躊躇があります。

4. 移住者からの聞き取りで難しいと感じることは何ですか。 ※複数回答可

選択肢	回答数（件）
言語の問題	10
事実関係がわからない、何が本当かわからない	6
必要な客観的情報がわからない（相談者自身が理解できていない）	5
なにを相談したいのかわからない（主訴が不明瞭）	3
相談者の言うことが現実的でない	3
聞き取りを直接することはない	3
必要な客観的情報がわからない（何を聞く必要があるかわからない、法的内容が理解できないなど）	2
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ 移住者コミュニティ経験者からの情報への信頼性が高く、客観的情報を共有しても受け入れてもらえないか、理解に時間がかかる。
- ・ ボランティアという立場でどこまで経済状況を聞いて良いのか、課題解決ができる見通しがあるわけでもない中で迷うことが多くありました。

5. 相談に応じるときにアセスメントを行っていますか。

選択肢	回答数（件）
アセスメントをしている	8
難しいケースのみアセスメントをしている	5
相談に応じることはない	2
アセスメントはしていない	1
その他	

その他の回答（抜粋）：

- ・ アセスメントに関する知識がなかった。

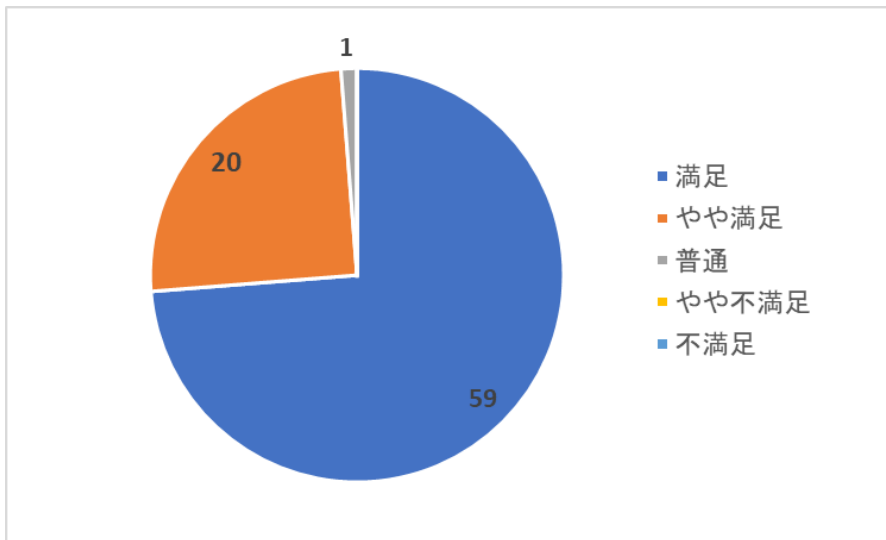
6. 支援の質向上のために取組んでいることがあれば、教えてください。

回答（抜粋）：

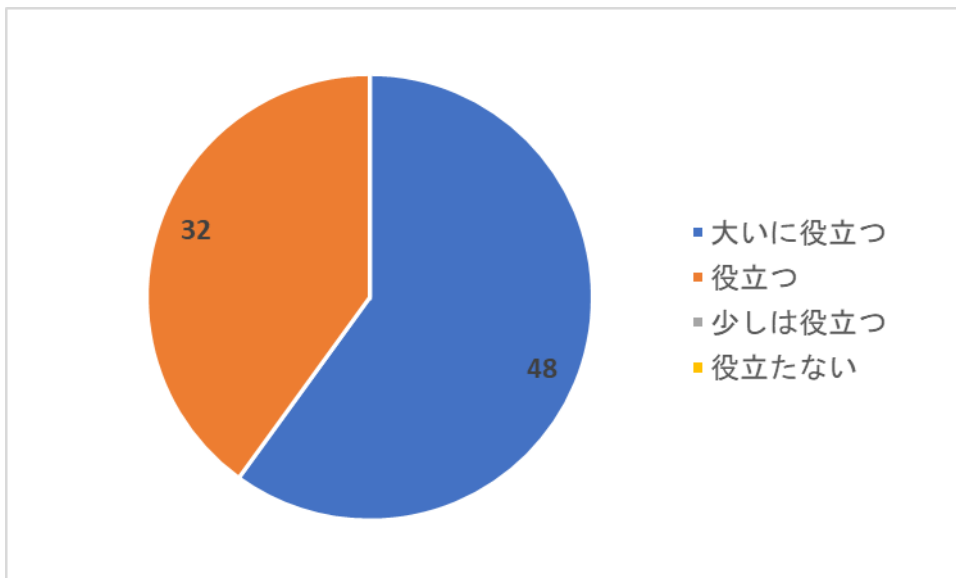
- ・ 研修等に参加し、能力向上を目指している
- ・ 多様な専門家や団体から学ばせていただくように心がけています。
- ・ クライアントのニーズや状況に合わせた社会資源の調査・学習、支援経験のある方・ネットワークへのコンサルテーションなど
- ・ 「通訳支援」の質向上としては、文化や制度など背景知識の拡充
- ・ 支援のやり方を相談したり、共有したりしている。
- ・ 一人で抱え込まないでチーム対応、全国ネットワークで勉強会。

【共通の質問】回答数：80件

1. 本日のセミナーはいかがでしたか。



2. 本日のセミナーは、あなたの業務・研究・活動に役立つと思いますか？



3. 今後取り上げてほしいテーマや、セミナーへのコメントがあればお聞かせください。

今後取り上げてほしいテーマ（抜粋）：

- ・ 各分野から外国人支援に関わる方のお話（弁護士や研究者、支援団体以外にも、日本語教師、聖職者、学校教員、地域の社会福祉士、等）
- ・ ネットワークが作れる交流などができるといいなと思いました
- ・ 問題共有や支援の実践をしている団体などとのつながりや相談
- ・ 事例検討会等のリアル開催をしていただけると幸いです。その中で、制度や文化、宗

教について理解が深まるようなような気がしています。

- ・ 難民認定申請中や難民認定者の方々が抱えている経済的な困難や生活上の課題などについて
- ・ 在留資格に関するセミナー
- ・ 宗教（共同体）の理解
- ・ 罪を犯す（犯した）外国人への支援
- ・ 仮放免者の医療支援の問題
メゾレベルでの支援の事例
- ・ 移住者と日本人という枠を超えたコミュニティづくりの可能性等メゾレベルの実践を聞いたり、アイデアを出し合ったりする相互交流的なセミナーなどで学べる機会があればどうでしょうか
- ・ 移住者から学ぶ日本人支援

コメント（抜粋）：

- ・ 外国につながる方だからこそ持っている強みや力、ご経験などに敬意を抱き、日本で自信を持って生活できるようにエンパワーメントしていく視点が大切だと感じました。
- ・ 学生でないと、なかなか「理論の話」を聞くことって少ないように感じます。今回の研修は、特に理論と実践をつなげる良い機会になりました。
- ・ 理論から実践、当事者の方の生の声まで、幅広く取り上げていただき、大変ありがたかったです。
- ・ 今後も多文化ソーシャルワークの視点での実践、経験や研究について伺える機会があればうれしいです。
- ・ 当事者の話も聞くことができ、良かったです
- ・ 対談内容やその内容の質問のやり取りも初めて知る内容ですが現状を受け入れる大切さ学ぶことができありがたいです。
- ・ 移住者との共生に係る法整備につなげるにはどうしたら良いのでしょうか。
- ・ （講義3では）難民の方々が治療に抵抗を感じる可能性があり、個々の方が、どのような支援を望んでいるのかニーズを確認する大切さを感じました。また、難民の方が望んでいるのは、今までと変わらない日常的な生活だというお話にハッとさせられました。（講義4では）バイステックの7原則などの理論に沿って実践を振り返る貴重な機会となりました。共依存にならないように、支援者側の感情を振り返ることが大切だと改めて思いました
- ・ 何かを掻き立てられたり、気持ちが前向きになりました。
- ・ 移住者とされる当事者からのお話しも聞くことができ、どのような過程を経て、今の日本での生活やキャリアを積まれているかがよくわかった。それぞれの移住者でケースは異なるかもしれないが、1人ひとりとの向き合い方を大事にしていきたいと感じた。その経験をしながら、いろいろな活動や情報を得て、社会全体へのアプローチを

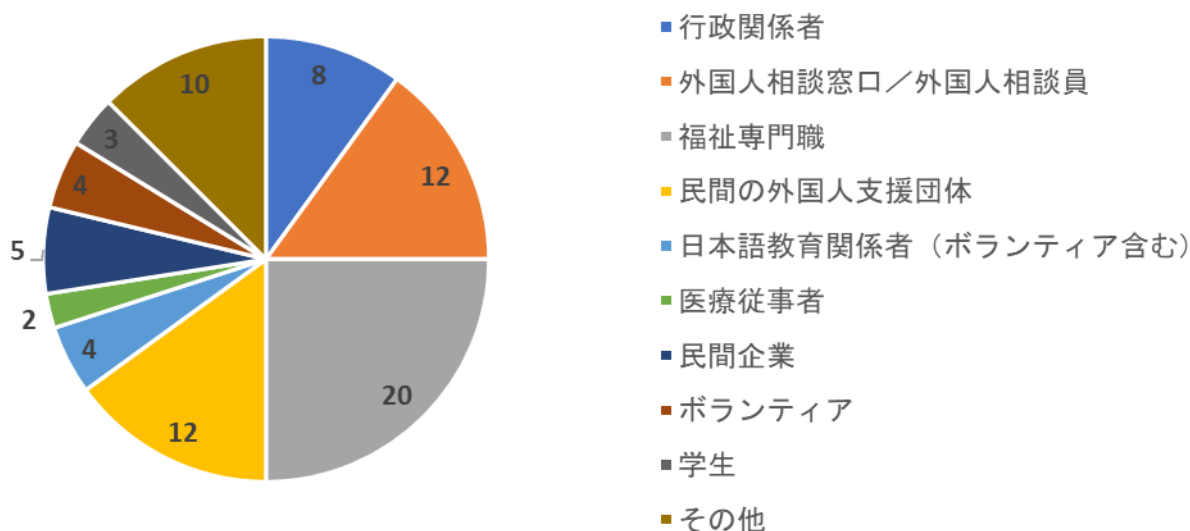
仲間を見つけて考えていきたい。

- ・ 移住者コミュニティ支援とアセスメントの重要性について深く学ばせていただきました。参加者の心理的ハードルを下げ、地域と移住者コミュニティの歩み寄れる落としどころを丁寧に模索なさっているご姿勢がとても印象的でした。地域と移住者コミュニティの架け橋のような役割を担っておられることに大変勉強させていただきました。アセスメントについては、客観的な情報と主観的な情報を整理しながら、ニーズを丁寧に把握し、フォローをして対応していく重要性を学びました。支援者の「人柄」が大切であること、気楽に地域とつながる機会が最初の一步になることなど、大変勉強になりました。

演習参加者コメント：

- ・ 模造紙に記入した「レットル」の数々は、社会の中、私の中の偏見を改めて見つめ直させてくれました。付箋の内容についてのリフレクションの時間がもっとあると良かったかな、と思いました。
- ・ 久しぶりの対面研修で、作業型でもあり、自然と色々な人とお話しできてよかったです。
- ・ 内容は意見交換もでき、充実していた。もう少し、時間を長くしてもらいたかった。
- ・ 他の実践者の方と交流できてよかったです。欲を言えば、最初の個人ワークに時間がかかってしまったため、グループで話す時間が少なくなってしまった印象があります。そちらももう少し時間が取れると、より深い議論になったように感じました。

4. ご所属



支援者向けセミナー 2023

移住者とソーシャルワーク

難民の背景のある人も含む移住者（難民・移民）からの相談は背景事情がわかりにくかったり、色々な課題が複雑に絡み合っているために対応が難しいことが良くあります。

当事者だけでなく家族やコミュニティといった当事者を取り巻く環境について理解し、働きかけを行っていくことも欠かせません。

ISSJ では、2020 年度より支援者向けセミナーを実施してきました。

2023 年度は、「当事者理解」をベースにそれぞれの実践現場で活かせるようなソーシャルワークとしての対人支援を学びます。



全4回開催

12/2・1/20
1/27・2/17
全て土曜日



オンライン開催 & 対面演習

各回への参加 or 通し参加
どちらでも OK
対面演習・定員 20 名



事後視聴 (録画配信) あり

演習 1 を除き
翌週火曜日 10 時から
1 週間視聴可



専門家・実務者 による講義

詳細は裏面へ

セミナーの狙い

- ソーシャルワークとしての対人支援について理解する
- ソーシャルワーク的な支援を実践に活かせるようになる
- 多様な視点を持って当事者を理解し、支援できるようになる

お申込み (Peatix)

はウェブサイトから



受講対象者

- 移住者の支援に関わっている外国人相談員や民間団体、ボランティアの方々、又は、これから支援に携わりたいと考えている人
- 職務としてソーシャルワーカー的な働きを担っている人、又は、ソーシャルワークの手法や役割に関心がある人

参加費

- 通しチケット (演習あり) : 12,000 円 (学生 10,000 円)
- 通しチケット (演習なし) : 10,000 円 (学生 8,000 円)
- 各回のチケット : 3,250 円 (学生 2,250 円) ※講義毎のチケットはありません

※学生でのお申し込みの方は、在学中の学校名を必ずご記入ください (所属部分)。

学生証等での確認を求める場合があります。

※通しチケットをお申し込みの方に限り、ISSJ ソーシャルワーカーへの個別相談 (無料) にもお申込みいただけます。

研修スケジュール

お申込み&詳細は
ウェブサイトから



第1回 12月2日(土) オンライン開催

- 講義1 13:00-14:00 ソーシャルワーク概論 - 外国人支援に向けて
講師 森 恭子 (日本女子大学教授)
- 講義2 14:10-15:10 移住女性と家族への支援
講師 南野 奈津子 (東洋大学教授)
- 対談1 15:15-16:15 当事者との対話
カディザ ベゴム
(ロヒンギャ女性コミュニティーリーダー)

第2回 1月20日(土) オンライン開催

- 講義3 13:00-14:30 難民化のプロセスとメンタルヘルス
—多文化間メンタルヘルスの視点から
講師 鵜川 晃 (大正大学教授)
- 講義4 14:45-16:15 相談援助とカウンセリング
講師 南野 奈津子 (東洋大学教授)

第3回 1月27日(土) 対面で開催

会場 都内で開催
※決まり次第お知らせ

- 講義5 13:00-14:30 文化の多様性に関する
ソーシャルワークの実践原則 ※録画配信あり
講師 ヴィラーク ヴィクトル
(日本社会事業大学准教授)
- 演習1 14:45-16:15 移住者に対する社会の中の偏見と
それへの対応を考える
講師 ヴィラーク ヴィクトル
(日本社会事業大学准教授)

第4回 2月17日(土) オンライン開催

- 講義6 13:00-14:00 移住者コミュニティを理解する
講師 近藤 花雪
(ISSJプロジェクトコーディネーター)
- 講義7 14:10-15:10 課題の整理とアセスメント
講師 石川 美絵子 (ISSJ ソーシャルワーカー)
- 対談2 15:15-16:15 当事者との対話
決まり次第ウェブサイトでお知らせします

主催・お問い合わせ

社会福祉法人日本国際社会事業団 (ISSJ)

ISSJは、人々が国境を越えることで生じるさまざまな問題の相談に応じる民間団体です。「移住者(難民・移民)の支援」「養子縁組」「Children Across Borders」を通じて、言葉や文化の壁を越えて、人々が福祉を享受できるよう支援をしています。

TEL 03-5840-5711

E-mail issj@issj.org 担当 近藤・櫻井

講師について



森 恭子

日本女子大学人間社会学部社会福祉学科教授。日本ソーシャルワーカー連盟国際委員。専門は、国際・多文化ソーシャルワーク論、コミュニティワーク論。とくに移民・難民への支援および共生社会の構築に関するソーシャルワークを研究。埼玉県で外国人の子どもの学習支援教室を運営し、生活面の支援にも携わる。近著に『いっしょに考える難民の支援』(編著、明石書店、2023年)、『国際ソーシャルワークを知る』(分担執筆、中央法規、2022)がある。

南野 奈津子

東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科教授。博士(社会福祉学)。研究テーマは児童家庭福祉、多文化ソーシャルワーク。日本社会福祉士会、日本国際社会事業団、NPO等で外国人支援業務や社会活動に従事。主な著書に『いっしょに考える外国人支援』(編著、明石書店、2020年)、『女性移住者の生活困難と多文化ソーシャルワーク』(単著、明石書店、2021年)、『地域で取り組む外国人の子育て支援』(編著、ぎょうせい、2022年)。

鵜川 晃

多文化間精神医学会 理事、現職は大正大学社会共生学部公共政策学科教授。専門は文化人類学、多文化間精神保健学であり、難民や移民の心身の健康問題や、異文化適応の課題、様々な生活様式の背景にある文化理解についての研究を行っている。最近ではベトナム人の妊娠・出産に見られる文化実践の変容、ベトナム人の性と生殖の健康と権利を守る心理教育のあり方について調査、報告を重ねている。

ヴィラーク ヴィクトル

ブダペスト出身、高校卒業後に来日。東京大学卒業、日本社会事業大学院修了(社会福祉学博士)。国際ソーシャルワーカー連盟アジア太平洋地域(IFSW-AP)会長補佐、アジア太平洋ソーシャルワーク教育連盟(APASWE)理事などを経験。現在、IFSW-AP財務担当、日本ソーシャルワーク学会理事、日本ソーシャルワーカー協会理事、日本社会福祉学会国際学術交流促進委員、日本ソーシャルワーカー連盟国際委員日本社会福祉教育学会理事。